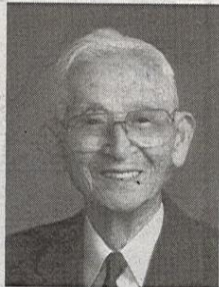


「第18回近代オリンピックアードを祝い、ここにオリンピック東京大会の開催を宣言します」。昭和39(1964)年10月10日、雨予報とは裏腹の絶好の秋晴れとなった東京・国立競技場。目の前で昭和天皇の言葉を聞いたフレッド・和田勇の目からは、涙があふれていました。

先の大戦後まもなく、昭和天皇と連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサーの会見が行われた際、正装して起立する昭和天皇と、ノーネクタイで尻ポケットに手を入れたままのマッカーサーの写真が撮られ、連合国軍総司令部(GHQ)の指示で新聞に掲載されました。「立派で賢い日本人が屈辱のまままでいては、いけない」。常に祖国日本に思いをはせていた和田は、この写真を悔し涙とともに見たことを決して忘れはしませんでした。

東京五輪開催で、日本は敗戦からの復興と先進国入りを堂々と世界に示すことができただけです。「日本はこれぞ一



フレッド・和田勇氏

フレッド・和田勇③

等国になったんや。よう立ち直った」。日本オリンピック委員会(JOC)から特別招待されていた和田は和歌山弁まじりにこう話し、誇らしげに正子夫人と語り合いました。

東京五輪で、和田は「東洋の魔女」と呼ばれた女子バレーボール日本代表の金メダルの瞬間も直接目撃しました。もし、和田が水泳日本選手団を自宅に招いていなかったら、日本水泳連盟の田畑政治会長の夢に耳を傾けていなかったら、私財と命を懸けて中南米を歴訪していなかったら、正子夫人が大反対していたら、日本の復興の象徴、五輪開催はもっと後回しになっていたに違いありません。

祖国日本繁栄のために…

名誉も見返りも求めず、祖国繁栄と、そこから派生する米国の日系人社会の隆盛のためならと全財産をなげうつ覚悟で中南米を行脚した、あの38日間。そして、夫を思い、信じ、支え、ともに祖国を愛した正子夫人の献身。この2人が東京に五輪を呼び、日本を復興に導き、経済大国へ発展を遂げた現在の礎を築いたのです。



和田氏も金メダルの瞬間を観戦したという1964年東京五輪の女子バレーボール日本代表(わかやまスポーツ伝承館提供)

少し余談になりますが、和田の日本に対する思い入れの強さは子供の名前にも表れています。長女的美弥子さんは「ミヤコ」すなわち「都、京都」。長男の時雄さんは「トキオ」つまり「東京」、次男のエドウィンさんは「江戸が勝つ」を由来に命名されています。

面倒見がよく、世話好き、弱者への配慮、祖国への情熱。和田が兼ね備えた、この人柄が不可能を可能にし、夢を現実のものにできたのではないのでしょうか。それは、わずか5年間の和歌山県御坊市での幼少期に育んだ、助け合って生きる精神が根底に息づいているのです。

日本は東海道新幹線建設や地下鉄・下水の整備、海外の渡航自由化など急速に経済成長をみせ、人々の暮らしに希望をもたらしました。一方で和田は常に、今だけがよければいいのではなく、この先につながる人々の幸せを考えていました。

「東京にオリンピックを呼んだ男」。和田の活躍の場は、これで終わりではありませんでした。

(わかやまスポーツ伝承館 事務局長 畔取由佳)

◇ 次回は8月14日付で掲載予定です。